あれから四十年

中村正之
北海道・六三・無職

北国に冬が来ると決まってキミを思い出す。

あの日、前夜からの冷えこみで雪道は凍てついていた。大学に向かう途中だった。吐く息は寒さで白くなり、まつげさえも樹氷のように白い花が咲いた。どんよりとした灰色の空に雪をかぶったナナカマドの赤い実だけが美しく映えていた。バス停に近づいたその時、背後から声がした。聞き覚えのある声だった。

振り返ったボクの目に映った振袖姿の若い女。キミではないか。その姿は薄化粧のキミの顔をひときわ上気させ華やかな空気をかもしだした。そしてキミの決別の言葉。

「写真を撮りに行くの、お見合いの……」

なにか言いだそうとするボクを連れの中年の女性が遮った。キミは促されて街角に消えた。卒業まであと三ヶ月。ボクは卒業論文に忙殺されていた。九月に会って以来、キミとは連絡を取っていなかった。旭橋のほとりを散策した折、キミの熱い思いはボクの思いよりも強く深いものだった。高校卒業後、キミはボクの消息を尋ね歩いたという。

ボクは浪人の身だった。二年間の浪人生活は心身ともにきつかった。だからキミと再会した、あの帰省の車中での事は互いの空白を埋める青春の喜びとなった。あの時からボクらはつきあいを深めていった。社会人のキミと学生のボク。

同じ年ながら精神的にははるかにキミの方が成熟していた。キミの期待に応えようと北海道を代表する新聞社の入社試験にも挑んだ。

結果は期待を裏切る不合格。将来の見通しが未だ見えないボクを待てなかったのであろう。この振袖がそれを物語っていた。キミは東京の人のもとに嫁いだ。

あれから四十年。この九月に高校の同期会が天人峡のホテルで持たれた。都合がつかずボクは欠席した。後日、幹事から送られてきた名簿の中にキミを見た。「逝去」の二文字がキミの消息だった。キミは将来性のある男に運命を託し早世した。ボクは別の道を歩み定年退職し生き永らえている。